

中国文芸界の組織と管理構造(1)

文聯・作家協会(その一)

釜屋 修

はじめに 作家身分・文学雑誌の変遷等一瞥

(1) 旅に出て招待所で宿泊の手続きをしようとする、係員が「作協」を「做鞋」と書いたので思わず苦笑したのは賈平凹だった。(『人民文学』1989.5「笑口常开」)。陸文夫は、「北京の人が話しているのを聞くと、『作家』と『坐家』の区別がつかない。北京の人ははっきり分けているのかもしれないが、私が聞くと作家は『坐家』のようなのだ」という(「作家 坐家」『光明日報』98.3.28)。そんな微妙なニュアンスは私にはわからないが、北京の若手作家の一人も、一日中家にいるから「我是坐家」と冗談めかして語っていた。陸は、「作家」も「坐家」もともに家から離れられない、「坐在家里写千家万家」が作家だとも書いている。その是非はともかく、中国において「作家」とはいったいどんな存在、身分なのか。一応の概念規定はあるであろう。新中国成立以来、中国人の生活全般をコントロールしてきたのは、「単位」(職場)であった。給与はもちろん、住居、50年代半ばから実施され、今はもう廃止された「糧票」「布票」等による物資の配給もすべて「単位」を通してであった。「単位」を離れては生活が成り立たない。文芸界においても事情は基本的には同じだった。ほとんどの作家の、文学活動から生活維持、個人の尊厳から政治生命まで、すべてに関与してきたのは、集約的に言えば、ある種のシステム管理であった。歴史の諸段階で、管理・関与の強度は異なるが、このシステム、作家に関しては、やはり中国文学芸術界联合会(以下文聯)、中国作家協会(作協)の二つが、とにもかくにも問題となるであろう。これらの組織は、もちろん大衆団体である。その「大衆団体」の背後に、中国共産党・政府の文化関係指導機関が控えていることは、言をまたない。それもおいおい触れていかねばならないが、私の、とりあえずの関心は、作協の歴史と役割である。本稿では、文学界の現状の一部の紹介、第一次文代会前後の状況が中心となる。

(2) ここでは、対象を「もの書き」に限定し、画家や書家は対象外としておく。かつて、作家が「文芸工作者」という表現の中に包括されて呼ばれた時代があった。今でも公式の演説等では用いられるが、実質は死語に近いであろう。ただ、解放後長い間——最近では中国人を含め「建国後」という表現が多い。ことは第二次世界大戦後の世界の評価にかかわる重要問題を内包していて軽率には論じられない。本稿は90年代の価値基準で50年代をなで斬りする立場はとらない——作家といえ、ごく少数の例外を除いては、すべて、いわ

ゆる「駐会作家」であった。創作活動と生活維持の最低保証を得るために、作家はどこかの公的機関(文聯、作協を含め、中央・地方の政府機関、文芸団体、雑誌・新聞社、出版社、大学・研究所、文学館・記念館・文化館あるいは軍、国営企業等)に所属していた。そして「業余作家」(「正業」の「余暇」に創作活動を行うアマチュア)から一人前の「専業作家」になるには、まず地元の作協分会に入会を許可され、のち、成績をあげて中央作協への入会が認められなければならない。その後、前述の、創作休暇等作家としての活動が保証される公的機関へ転出するケースが多い。この原則は、基本的には今も踏襲されていると考えてよい。作家の自立について、ある年配の研究者は「若い人はともかく、歳をとると元気がない。それに、揺りかごから墓場まで国にめんどうを見てもらうことに馴れちゃいましたからね」と語ったことがある。

作家たちも、79年以来の「改革・開放」政策の実施と深化、市民的欲望のかつてない充足を体験し、一方では六・四天安門事件の高揚と挫折を経験した。文化のインフラともいえるべきメディア等の基盤整備は、90年代に入ってから、作家自身の、身分や生存形態に対する思索・変革の意志をよびこんだ。上からの「文芸体制改革」のよびかけも当然あった。元文化相で作家の王蒙も「大鍋飯」に反対し、文芸団体改組(端的に言えば、官制組織と競争原理をとり入れた民間団体との二本立てにする)を人民代表大会等の場で提起したといわれる(『争鳴』93.12等)。反対論の中には、そんな「競争」はすぐ「官」にとりこまれ、反政府的団体や雑誌は淘汰されてしまう、というのもあった。そうした議論をよそに、問題を实际的な力の結集で解決しようとするグループが現れた。TVドラマ『渴望』『編集部物語』をヒットさせた王朔らの「海马(タツノオトシゴ)集団」(正式には中国战略与管理研究会海马影视创作室、1992.5結成)の出現がその嚆矢である。ようやく、しかし急速に普及したテレビがもたらした新しい文化情況が彼らの対応の基盤を形成していた。メンバーを定め、規定を設け、事務所を設置し、弁護士を雇い、映画会社・テレビ局・出版社との交渉を集団として行い、著作権、制作費、原稿料(「议价」と呼ばれる創作側からのカウンタービットも行う)等の權益を擁護するギルド組織であったが、王朔らの、もう一つの狙いは、王自身の「おカネのためじゃない、今の文芸界から離れたかった」という言葉があるとしても、所属単位に縛られない自由な創作の立場と利益の確保であったことはまちがいない。どこにも所属せず、自らの力量で、制作費や原稿料を稼ぎ、それを唯一の依拠として作家の自立を勝ちとる実験への挑戦であった。結局、集団は利益配分、身内による王朔の名前の詐称等で内部崩壊したとはいえ、その画期的意義は否定できない。王朔は、単純な「ゴロツキ」ではなかった。

おりしも国内の著作権侵害が続出、さまざまな出版トラブルが法廷にもちだされたし、海外の著作の中国国内での不法出版をめぐる国際与論も騒がしくなり(ガルシア・マルケ

スはお忍びで上海に出かけ、自分の作品の翻訳状況を調べたことがあった)、中国の作家も自作の海外での翻訳に関心を払うようになった(個人的に、莫言から状況調査を頼まれたことがある)。中国政府は著作権法ならびに関連法規の整備に着手し、1992年、相継いで、ベルヌ条約(発効10月15日)、万国著作権条約(同10月30日)に加盟した。

作家が行政職の肩書きをもつことに対して、作家本来の性質から疑問を提起する人もいる。「中国のある作家たちが、作家という神聖な名前の前に、ただ所属しているにすぎない行政級別の役人の肩書き」をつけているのはおかしい、ある作家に質したところ、彼もわからない、何らかの理由で外せないのだろう、と答えたという。その人は、作家は「必ず一つの機関に隷属しなければならないか」「必ず専門職をもたなければいけないか」「必ず行政職務をもたなければいけないか」という疑問を提起し、国家の作家に対する重視は多様なチャンネルで表されるべきだし、作協も転換の時期にさしかかったのではないか、作家の地位向上は作家自身の力によるべきと主張する(山林雪「作協は民間に下りよ」『北京晩報』94.7.19)。

かくて、90年代前半から「合同作家」「合同作家」「签约作家」と呼ばれる年限付き契約作家が現れた。市、省と契約した者、出版社と契約した者、他省の契約作家招聘に応募して選ばれた者等、形態は多様である(注1)。一方では、「駐会作家」から「自由撰写人」(フリーライター)に転進する人も増えた。「駐会」した職場を定年退職し、やむなくフリーになった人も含むが、「腐敗」に不満で工場を離れ「自由」になった人もいる(陸錫銘、『文芸報』99.3.2=地方在住者、「厳粛」文学雑誌では原稿料も安く、生活費を稼ぐのはたいへん、と)。もちろん、余華、劉毅然といった人気作家も多くフリーライターになっている。「駐会」「自由」を問わず、契約作家になることができる。具体例は注1を参照いただくが、この契約作家制度、遼寧省作協のケースに見られるように、政府筋も強調している「文芸界体制改革」の一環としての巧妙なヴァリエーションという様相が顕著である。揺りかごから墓場までの「終身制」打破という大義で新たな管理強化につながりかねないのである。そして、90年代末には、「職業作家」という呼称も定着しつつある。これは、私企業の出現、社会の職種の多様化に伴って、作家も一つの職業として認定、確定しようという意味合いが強く、必ずしも身分規定ではないと思われるが、「駐会作家」=「専業作家」という従来枠に大きな風穴をあける動きの中で生まれたことは確かであろう。

時代は激しく動き、経済改革=明らかな資本主義化=文学芸術の商品化・消耗品化が進んだ結果、作家の存在形態も変化した。作協の役割、存在意義も大きく変化してきたにちがいない。

(3) 単行本、雑誌をとわず、小説(長・中・短)、散文、詩歌、評論、——この四ジャン

ルを編集関係者は「四大塊」「四大件」と呼んでいる——報告文学、研究・学術論文その他、ジャンルを問わず、中国の出版活動は、日本や世界と比較してみると、人口の絶対量を視野にいれてもなお驚異的と言えるのではないか。文学雑誌など、私の学生時代(1950年代)、『人民文学』『文芸報』だけで文芸界の概容がつかめたといっても過言ではなかった。しかし、新时期文学の時代に入ってから文学雑誌の氾濫は、けたたましい、としか表現できないくらいすさまじい。ピークとされる1993年頃、中国期刊協会に登録しているものだけと考えられるが、全国で雑誌社が7000、うち文芸雑誌は800社とする報道がある(注2)。しかし、その段階でも、生活情報誌・通俗雑誌が大量に出現していた。広州の「生活類文学期刊」と分類される『家庭』は購読家庭200万戸。一方、全国紙『人民日報』は、ピーク時600万部だったのが94年、目標300万部というから、実態はそれ以下であろう。上村幸治『中国路地裏物語』(岩波新書99.2)は1996年217万部とする。ところが、広州の地方紙『南方日報』は93年70万部に達している。テレビの普及、娯楽施設の拡充等もあって、民衆の活字離れ、読者の文学離れ、なかならず純文学の危機は、常識となった。『詩刊』副編集長の葉延濱は、文学雑誌は「朝のお茶をすませたら、昼食を憂え、昼食を食べたら夕食はない」と雑誌経営、維持の困難を語った。上記800社の平均発行部数は3000、年間欠損の平均額が50万元。因みに、この段階で、最盛期150万冊の『收穫』が約10万冊に落ちこみ、広告不掲載の姿勢は崩さないまま値上げに踏みきっている。『收穫』『鍾山』『当代』と並んで純文学雑誌「四大名旦」とされる『十月』は、80年代の50～60万冊から11万冊まで落ちている。文学関係で「一位」と豪語したのは『中篇小説選刊』(1981創刊当初3万、82年20万、ピーク50万)であった。上海文芸出版社1963年創刊の『故事会』は、純文学ではないが、94年「読者が最も好きな全国十大雑誌」に選ばれ、97年には「全国百種重点社科期刊」に入選、さらに99年2月、文化出版物としては最初の「著名商標」の指定を上海市工商行政管理局から受け、発行部数400万となった。ほかに好調を伝えられるのは『小説月報』(百花文芸出版社)くらいで、98年4—11月に30万冊を維持しているという。こうした数値は、純文学定期行物の不振、あるいは黄金期からの落潮の証左としてあげられる。それにしても、諸条件が異なるとはいえ、日本の出版事情と比べれば、尋常ではない。

ともあれ、文学関係の出版社は苦悩の中にある。そこから、さまざまな「改革」が生まれしてきた。以下のパターンに概括してみた。

- A 編集・誌面の刷新——①多様化—通俗化、「生活類」化、総合化
②商業広告掲載、企業・人物の提灯記事
- B 経営方式の転換——③企業との提携
④出版社同士の連携

⑤企業・政府からの自立(政府からはリストラ)

C 休刊・停刊・他分野雑誌として再生

A①の実態はそれこそ多彩多様、全体情況の詳細な把握は困難である。文学雑誌の看板は下ろさないものの、内容を文学一本から、政治・経済・社会・教育・スポーツ関係等のノンフィクション分野に広げ、スタイルも随筆、散文、ルポ、回想文等を多用する。これを「跨文体」「模糊文体」あるいは「『文学』から『大文学』への転換」等と呼ぶ。一部メディアは、こうした傾向を「開辺拓疆」と賞賛、評価している。99年1、2月に見られる傾向としては、次のようなものがある。

『青年文学』: 80→112に増頁、値上げ、小説の比率を3分の1に。

『四川文学』: 誌面構成を大幅に刷新、ノンフィクション、「跨文体」作品の比率が50%を超す。

『大 家』: 「凸凹文体」のキャッチフレーズでノンフィクションと「写実」の混交した文化思想テキストに変身。

『小 説 家』: 文学史、文化史学に重点をおき、文学作品の比率を下げ、「文化文学学」という新機軸を掲げ、20世紀文学を総括する。

『黄 河』: 「四大件」中心から思想文化中心へ。

『芙 蓉』: 文化視野と思想天地に重点。

こうした状況の下で「純文学」を守る、あるいは通俗化に反対して、健闘する雑誌もある。吉林の『作家』、南京の『雨花』、『広州文芸』、海南島の『天涯』、貴州の『山花』、『上海文学』(前述の大型雑誌「四大名旦」に対し「四小名旦」という表現があるが『山花』以外の三誌の名前は未確認)。大型誌では、安徽の『清明』、広州の『花城』もある。そして、前述の刷新について、「联网重奏」「话语空间」「凹凸(または凸凹)文体」等の試みは、編集技術の問題にすぎず、長い文学発展の歴史の必然的結果としての「四大件」の意義を否定することが果たして文学の面目を一新できるのか、との反論も出ている(顧礼俊「“四大件”何罪之有」『文芸報』99.3.25)。

Bに属するものの実態も単純ではありえない。どんな代償を要求されているのか、実情はよくはわからないが、企業から資金援助を得て刊行を維持している雑誌は多数にのぼる。冠文学賞の盛行もそうした現象の一つである。③の例としては、深圳进出口貿易集団中込工贸公司与『広州文芸』、貴州黄果樹集団と『山花』は一般企業との連携の例である。後者の場合、企業は94年から以下のような資金援助(単位元)を続け、雑誌奥付にも社名を明記している。

94年 12万 95年 12万 96年 20万 97年 30万 98年 32万
99年 30万 2000年 50万 (99年以降は予定額)

一般企業ではなく、身近の出版社・出版資本に頼るところも多い(④のケース)。雑誌掲載で評判になった作品は、提携出版社から単行本として出版される。『清明』の安徽文聯と安徽出版社、『大家』と雲南出版社等がある(後者の関係は変化する＝後述)。出版社同士の提携をより集中・強化するものとしては、すでに『光明日報』『中華読書報』『生活時報』『文摘報』を擁する「光明日報報業集団」があるが、上海にも二つの動きがあった。一つは、すでに形成されていた「文匯新民聯合報業集団」に『文学報』が加盟したこと(98.11)、今一つは、当面は直接文学出版に関係しないかもしれないが、上海の人民出版社、教育出版社、訳文出版社、漢語大詞典出版社、図書会社が協同、「上海世紀出版集団」を結成したこと(99.2)。後者は、地域、業界、国境を超えた資本の一体化、経営の多元化、生産手段の近代化を図る、出版業を主体とする中国最大のメディア資本の実現をめざすという。両者のスタートは、ともに地元の党、政府機関はもちろん、文聯、作協からも祝福されている。

こうした、90年代を特徴づける、活発な、「消費本位」「走向买方市場」の「改革」、再編は、当然ながら、文学雑誌(だけに限らないのだが)の自然ならびに人為的淘汰をよびこんだ。98年後半から著しくなるが、健闘していた『瀋江』『崑崙』『峨嵋』小説等が休刊、停刊となった。情報紙ではあるが愛読者の多かった山東の『作家報』の停刊、改名して他分野への進出は、あまりにも唐突で背景に興味をそそられるが、探求の手だてではない(注3)。また、「两年一獎、每獎一人、一獎十萬元」(第一回受賞は莫言の『豊乳肥臀』)で話題を呼んだ『大家』、先に出版社との提携の例として紹介したが、98年秋、自ら雲南人民出版社の傘下を離脱、大家文学雑誌社として自主経営に路線変更した。そしてあの『人民文学』が50歳にして「離乳(断奶)」措置をとられることになった。70年代末～80年代初め146万冊あった発行部数は、98年には10数万冊に減ったという(注4)。政府の補助金が99年の10萬元を最後に打ちきられ(一説では3年間递减)、2000年からはすべての経費を「自己解決」しなければならなくなった(『作家報』98.12.10)。これに対しては、99年3月の全国人民代表大会で32人の代表が「省級」刊行物(約30行政単位、各1)への経済援助を求める要求を提出している。貴重な「文学浄土」を守り、「逼良为娼」を回避するためには「皇粮」を継続させよ、というのである(『文芸報』99.3.16/4.1)。

作家、文学界をめぐる激動の諸相は、上記以外にもさまざまな分野、事象の上に現れている。今は、まずは解放前後、第一次文代会前後のいきさつの一端を追ってみることにする。

第一次文代会前後

中華人民共和国成立3ヶ月前に開かれた中華全国文学芸術工作者代表大会(第一次文代会)は、7月2日から7月19日まで、会期17日間に及ぶ(大会開会日は13日間＝注5)。

その最終日の7月19日、中華全国文学芸術界聯合会(1953年中国文学芸術界聯合会と改称、文聯)が成立、また他の芸術分野の団体と相前後して、中華全国文学工作者協會(文協、1953年中国作家協會と改称、作協)も結成された。解放後まもなく発行された文学史書としては、王瑤『中国新文学史稿』(上下)がある(注6)。第一次文代会の部分を書いてみる。

1949年7月に召集・開催された中華全国文学芸術工作者代表大會は、中国革命がすでに基本的勝利をおさめた時期に、人民の首都北京で挙行された。このような空前の大会は、人民の文芸に対する重視と需要を表し、全国文芸工作者の団結と大合同を表しているとともに、これから以降がまた新しい始まりであることを表している。…(約10行略)…中国の新文学史は、五四から文代会までちょうど30年、新しい中国のスタートに伴って、今後は、異なった、一つの新しい時期が始まり、必ずやいっそう燦爛として豊かな成果を实らせるであろう。

それから長い年月を経て出版され、「好評」といわれるものに、孔範今編『二十世紀中国文学史』(上下、山東文芸出版社97.7)がある。その第26章は次のようになっている。

1949年7月2日、解放戦争の轟々たる砲声の中、第一次文代会が北京で開幕した。解放区と国統区からやって来た二つの文芸大軍が初めて実現させた勝利の大合同である。この大会において、茅盾と周揚が…(約5行略)…これと相呼応して、新中国の作家たちもすべて各級作協によって組織され、各種刊行物も、徐々に、各主管部門により統一的に計画、準備され、管理され始めた。

王瑤のは「緒論」「四、分期」の中の記述。孔範今のは「第26章、権力政治規範下の大陸文学(1949-1976)」の「第一節、三次にわたる批判運動から大躍進まで」の「一、作家の大合同と解放初期の文学情勢」の中の記述である。およそ46年の歳月、それも激動などという言葉が白々しいまでのすさまじい歴史経過を隔てて、二つの文学史書の記述は大きく異なる。上に引いた目次自体にもくっきりと表れている。前者が、豊かな開花、結実に向かう起点と位置付けたのは、当時の客観的世界情勢、高揚した人びとの期待心理から言って、当然であろう。後者は、歳月を経、「栄光の歴史」の再評価、「重写文学史」の運動等を経て生まれてきたものである以上、大会の成功よりもその直後に継起した、おぞましい、政治偏重の文学運動の「反思」へと重点が移るのも、また当然の帰結であろう。近刊の黄修己編『20世紀中国文学史』(上下、中山大学出版社98.8)では、「第8章、共和国文学の誕生」がこの時期を対象としているが、第一次文代会への言及はない。三書とも力作であり、性急に当否を論じるつもりはない。しばらくは、事実即して第一次文代会の前後を追っていきたい。

第一次文代会に集まって来るまでの、各文学者の辿った道筋は、紆余曲折を経、複雑怪奇である。今はまだ十分にその後追いができないが、ある人間の、ある時点での一つの選

択、あるいは強制された選択が、その人間のその後を運命付けたことだけはまちがいない。例えば蕭乾、自分が書いた1947年5月『大公報』の文芸社説「中国文芸はどこへ行く」が引き起こした「悶着」にふれて次のように書いた。

この悶着がもたらした報いは、私の思いも及ばぬものだった。私は沈從文よりは幸運で、1949年7月の第一次全国作家代表大会にはとにかく参加したけれども、しかし1956年のほんの数ヶ月を除いて、基本的には文芸の陣営から排斥されてしまった。(蕭乾／丸山昇ほか訳『地図を持たない旅人』花伝社93年2月-p.93)

同書訳注にもあるとおり、作家代表大会は第一次文代会のことであり、「悶着」は郭沫若との確執である。107ページでは、帰国直後の宿舎問題にふれて蕭乾は「ある人々は当時、割り当てられた宿泊所から、各人の等級相場を推測したものである。どうやら、郭沫若のような最高級は北京飯店で、その次が翠明荘である。…私は…等級を示しているとも考えなかった」と書いている。丸山も別の所で「文化大革命後に書いた文章だから、当時のプラス面を懐かしむことで、逆にその後の歴史のマイナス面を浮かび上がらせるという意図も加わっているかも知れないが、この叙述自体は、当時の心境をそう偽っていないだろう」と書いている(「民主を求めた人びと」9『日中友好新聞』94.12.5)。蕭乾の心境はまちがいないであろう。ただ、こうした回憶は、なお単一の当事者の証言だけではことの真相を確定できない。「私は沈從文よりは幸運」から、蕭乾とその文学上の師である沈從文との関係が想起させられるが、「沈從文と蕭乾——師弟から赤の他人へ」(『作家文摘』99年3月30日=注7)の一文など、激動にふりまわされた二人の関係の断片を紹介するが、はたして何が真実に近いのか、なお予断が許されない感じがする。その沈從文、1930年代すでに批判を受けながら、1939年1月、中華全国文芸界抗敵協会雲南(昆明)分会会員大会では一度理事に選ばれている。しかし、1943年2月にはまた激しい批判を受け、さらに解放直前には郭沫若、馮乃超、邵荃麟らから激しい批判を浴び、第一次文代会にはついに呼ばれなかった。その前年、1948年、北京解放を前にして、国民党文化人がいっせいに脱出しようとして、朱光潜らに働きかけた時、沈從文も誘われた。しかし、朱も沈もこれを拒否して北京にとどまっている。そして、49年3月にはノイローゼから自殺を図り、第一次文代会の後、鄭振鐸の紹介で新設された歴史博物館に入り、以後文芸界から「消え」、服飾史研究に沈潜していったこと、周知の事実である。沈從文の歩んだ道もまた複雑を極め、不明部分が多い。第一次文代会の頃、周恩来は「今いないのは、われわれの古くからの友人老舎さんだけだ」と語ったという(注8)。老舎はアメリカで坐骨神経痛の手術を受けて退院した後、周恩来から帰国要請を受けたという。曹禺の回想によれば、「1949年(秋か=釜屋)、周恩来総理が北京飯店の私の部屋に来て私に、老舎に早く帰ってもらいなさい、と言った。それで周総理は司徒慧敏に手紙を書き、ほかに私がスイス経由で老舎に手紙を

出したが、彼はともに受けとっている。老舎はすばやく決心を下し、その年の11月にはもう帰国していた。」(注9)。もっとも、老舎は、上海解放(1949年5月27日)直後、在米の石垣綾子夫妻を自分の部屋に招き、中国の新生への期待、帰国の決意を語っている(注10)。老舎が北京に到着するのは49年12月12日、第一次文代会は終わっていた。『中華全国文学芸術工作者代表大会紀念文集』(1950.3)の南方代表第二団の中に老舎の名前は載っている。同書「附表」の「代表団人数一覧表」には「未到」の項目があるが、数値はいっさい記入されていない。この資料からは、名簿に記載されているが何らかの事情で参加できなかった人間は確定できないことになる。とにかく、老舎は北京入りし、文聯は翌年1月4日、新年聯歡茶会を開き、老舎帰国を歓迎した。周恩来の脳裏に残っていた老舎、残っていなかった沈從文、周恩来がすべてではないにしても、一つの分かれ道ではあった。

陳鳴樹編『二十世紀中国文学大典(1930-1965)』(上海教育出版社 94.12)の年譜には、年度毎に「創作」「理論批評」「訳文」「作家活動」「文壇紀事」「文化要録」「社会背景」の項目を設けている。その「作家活動」に多数の人物の動きが断片的に記載されている。詳細な記録ではないので、個々の作家の具体的状況は把握できない。しかし、その慌しくも生々しい動きの中に、当時の党の方針や指令が、垣間見えはしないかと思う。もちろん、作家たちの個々の動きと意味を確定するには、より膨大な資料が必要であるし、運動の中心にいた重要人物——周恩来、周揚、郭沫若ら——の日記や備忘録が公開されなければならない。とまれ、今はその限られた資料の中の、1948-49年の動きを整理してみよう。

- a 主に解放区で活動した者——康濯、孫犁、徐懋庸、丁玲、陳荒煤、何其芳、碧野、杜宣、趙樹理、李季、陳企霞、秦兆陽、公木、吳伯簫、成仿吾、歐陽山(蕭軍はこの中ですでに批判を受けている)
- b 明白な党の指令で動いている者——邵荃麟、胡風、熊佛西、周立波、夏衍、茅盾
- c 国民党に追われた者——洪深、戈宝権、宗白華、李広田、戴望舒
- d 国民党の招聘を拒否した者——朱光潜、朱自清、沈從文、楊振声
- e 香港移動——臧克家、于伶、張天翼、劉芝明
- f 南下、台湾行き——謝冰瑩、梁実秋
- g 逝去——朱自清
- h この時期に入党した者——宋之的、李広田
- i 海外——老舎

以上は、資料の記述に随って分けただけである。a, eのグループにも党の指示で動いた者がいるにちがいない。1949年1月、北京解放とともに各地の活動家が続々北京に集まって来た。7月第一次文代会の「大合同」とは、こうした複雑な運動の流れの、間にあわせの、慌しい、高度に政治的にしてきわめて拙速の、スタートだったのではあるまいか。

「大合同」に到るまでの、解放区、大後方、国統区、日占区等における文芸運動も、それぞれ情況は複雑を極めたはずである。解放区については『中華全国文芸界抗敵協会史料選編』(四川社会科学院出版社 83.12)や『晋察冀文芸史』(中国文聯出版公司 89.12)等が出版され、若干の整理が可能になりつつある。

中華全国文芸界抗敵協会は、中華全国戲劇界抗敵協会(1937.12 漢口)に遅れて 1938 年 3 月 27 日漢口で結成された。宜昌、成都、香港、延安、桂林、広東曲江、貴陽等各地に分会ができる。日本の激しい攻撃の中、活動は一進一退を繰り返しつつも漸進したようである。そして、1940 年 7 月、晋察冀分会が成立する(以下、記述の便宜上、中華全国文芸界抗敵協会を「全国文協」、晋察冀分会を「辺区文協」とする)。この「敵後唯一」の辺区文協は、全国文協から高い評価を与えられ、分会ではあるが、解放区で独自の活動を展開することになる。

この辺区文協、前史を辿れば、全国文協に呼応して、1938 年春、「辺区文化工作者救亡協会」(臨時組織)として結成されていたが、情勢の進展にあわなくなり、1939 年 2 月 15 日、臨時代表大会を開いて、組織強化。辺区四分会、西戦団、海燕社、戦地社、鉄流社、美術協会らが結集して晋察冀辺区文化界抗日救国会(文救会。主任劉平、副主任葉正煊)に改組・改称、地方組織も統一し、指揮系統を確立した、とされる(注 11)。やがて、美術(39.3)、戲劇(39.7)、音楽(40.4)が全国文協の傘下に入ると、前記文救会も全国文協の下部組織としての辺区文協となる。全国文協への参加はいちばん遅れたが、会員は最多数であった。主任に沙可夫、副主任田間、常任委員には上記二人に加えて、魏巍、何洛、康濯、執行委員には成仿吾、周而復、鄧拓。その後の活動の中で、楊朔、孫犁、梁斌、楊沫も登場する。そして、1941 年 6 月、それまで文学、戲劇、音楽と別々に活動してきた各組織を統合した晋察冀辺区文化界抗日救国聯合会(辺区文聯)が成立する(主任沙可夫)。辺区文聯は、日本軍の苛烈な攻撃と戦いつつ、苦しい活動を続ける。42 年 5 月には、根拠地の縮小から、再び改称、晋察冀北岳文救会となり、活動の重点も農村劇団の建設、育成等に縮小せざるをえなくなった。43 年 5 月に、第 2 回代表大会を開き、「新啓蒙運動の展開」「文化界統一戦線強化」「整頓三風」「文化工作者の下郷」「文聯の指導強化」の方針をきめる。42 年 5 月毛沢東の『文芸講話』が出ると、44 年 2 月の会議で、主要任務を毛沢東文芸思想の宣伝におくこととなる。しかし、その頃辺区文協機関は撤収、文芸工作者は各県・区の宣伝・出版機関に移り、基層工作が中心となっていた。やがて八・一五、抗日戦は勝利し、8 月の張家口解放が大きな転機をもたらす。辺区の文芸工作者がいっせいに党・軍・政府機関とともに張桓に移動した。今までの農村文化中心の活動も都市文化対策という新しい課題に直面した。晋察冀辺区の文芸工作者と、延安からやって来た人々との合流もここで行われた。1946 年 1 月 3 日、張家口で延安の人々を歓迎する会が開かれた。周揚、丁玲、蕭軍、

艾青、古元、吳邦暁、王朝聞らが迎え入れられた。4月には、全国文協張家口分会が成立大会を開く。闘いの拠点、実際上、全国文協から辺区文協へと移ったのである。46年7月、内戦が本格化、解放軍が黄河を渡り、毛沢東たちも河北平山県西柏坡で全国解放の総指揮をとる。そして、1949年1月の北京解放、多くの文芸工作者、文学者らが、北京(当時はなお北平)、天津に結集する。

さまざまな経験、動機、願望、価値観を持った人間、文学芸術に対するさまざまな考え、実績を持った人間が、歴史的な大転換の坩堝の中に、ごっちゃに流れこんだのである。「思想」は堅く結ばれたかに見え、「団結」は揺るぎなきかに見え、そして「価値観」は未分化だった。新しい国造り、新しい文芸陣地の構築に向かい、さまざまな具体問題に直面して初めて意見が割れ、価値観が分岐に向かう。その、未分化の頂点こそ第一次文代会であった。

解放区からやって来た仲間、同志といえども、必ずしも同じ地域で活動していたわけではなかった。丁玲たちと趙樹理たちをめぐるおもしろいエピソードがある。北京解放直後であろうか、「小集団主義」「山頭主義」などと呼ばれた、今では笑い話のようなセクト主義である。太行山地区から来た趙たちは、華北新華書店の仕事から、北京では『工人日報』・工人日報社の仕事に携わっていた。彼らから見れば、丁玲、沙可夫、艾青らは「高級人物」、趙の兄貴分の王春は「空論ばかり論じて」と批判的、趙も同調していた。丁玲は、初めて趙樹理に会った時のことを日記に書いているとのことであるが(注12)、趙は丁玲の「点心包」の中にパンを見つけ驚いたという。「高級人物」(蕭乾たちといい趙たちといい、この言葉当時流行したようである)は、東総布胡同に、趙たちは西総布胡同に住んでいた。建国門内大街の西側を平行する、現存する通りである。第一次文代会の事務所も、文協(作協)の事務所も、党グループ会議の場も「東」だった。スターリン文学賞をめぐる、王春は趙樹理を推し、結果的には丁玲推薦に決まっている。両グループの対立が激しくなり、堪りかねた周揚が、ある日双方5人ずつを呼んで、今後誰かを批判する時は私の「批准」が必要と釘をさしたという。丁玲側には陳企霞、嚴文井、王淑明(もう一人は不明)、「西」側は、趙以外に王春、苗培時、顔天明。この会議は「東西総布胡同会議」と呼ばれたという(注13)。趙が長女広健をつれ霞公府15号で上下に分かれ、老舎と同居するのは、49年10月中旬のことである。

また、ここへ到るまでの各解放区内部の「整風」「整人」も熾烈を極めたようである。韋君宜『思痛録』(北京十月文芸出版社98.5)は、限られた地域の体験とはいえ、すさまじい様相を伝えている(作者の姿勢については、今は論じない)。このこともまた、各人の辿った道筋を考える上で、無視できない一つの要素となるものと考えられよう。

かくて、勝利の高揚と、激動の混沌の中で、第一次文代会は開催されたのである。

大会と阿英日記

阿英(銭杏邨／張若英 1900.2—1977.6／大会当時 49 歳)は、北伐、左聯以来の活動家であり、第一次文代会の後、1946—48 年中共中央文委書記、大連市委文委書記、49 年から 51 年は天津市軍管委文芸処長、市文聯主席を勤めている。彼が残した「第一次文代会日記」が呉泰昌によって整理され、『新文学史料』第 1 輯=1978.1 に発表されている(注 14)。呉によれば、阿英は 1949 年 4 月 12 日、軍とともに瀋陽から天津へ、5 月 10 日北京に入っている。日記は、5 月 9 日から、第一次文代会をはさんで、8 月 12 日まで。記録を残さなかったのは、5 月(4 日分)、6 月(7 日分)、7 月(8 日分)、8 月(5 日分)である。阿英は、8 月 13 日北京を離れ、天津へ帰っている。大会では、華東代表団団長、主席団常務委員、第 5 日の議長、提案整理委員会主任である。大会の公式記録は、『中華全国文学芸術工作者代表大会紀念文集』(同大会宣伝処編 50 年 3 月／宣伝処は、主任何其芳、副主任嚴文井、吳伯簫)「三、大会紀要」にある。以下、この公的資料と阿英の私的資料を並べてみる。少しは歴史の壁が見えてはこないか。阿英日記中、人名のみの部分は、その日に訪問、来訪した人、()内の人名は電話連絡の相手。各人名の後の×印は、訪ねて会えなかったり、電話が通じなかった場合。人名の後の：以下は、話の概容、ただ日記にはそれ以上の詳しい内容はない。

年月日	大会紀要	阿英日記
1949 3.22	解放区、国統区の作家初めて合同会議。全国文協と辺区文協の理事で大会準備の相談。準備工作委員会(42 人)選出。主任郭沫若、副主任茅盾・周揚、秘書長沙可夫。	
3.24	準備委員会第 1 回会議、正式発足。上記 4 人に葉聖陶、艾青、李広田を加え 7 人が常務委員。	
4.30	準備委第 1 回臨時常務委。報告、起草等の分担決定：国統区文芸工作(茅盾)、解放区(周揚)、規約(沙可夫)、大会宣言(何其芳)。	
5. 4	準備委、『文芸報』週刊発行。	
5. 9		在天津。陳隴、李定坤／孟波(蒋天佐別の招待所にいると)／夏衍今朝北京へ、眼前ですれ違い／明日 11 時半の列車で北京へ。
5.10		1 時 55 分北京東駅着。風砂強し／車で西单槐胡同の中央組織部へ、幹部部長の寥志高：天津に人材なき故残れ、と。湖南、華東を希望するも安子文部長不在のため後日話しあいとなる／会計師胡同の高幹招待所へ／(李克農＝解放軍総副参謀長＝×)／柳亜子、頤和園へ引越したと／周揚×、蘇靈揚。
5.11		前能寺 16 号に周揚夫妻を訪問：大会まで残って重要問題を検討しろと／(袁牧之：昼食を約束)／食後、李克農訪問。秘書より夏衍北京飯店 303 と聞く／(袁牧之：明日夏衍と会う約束と)

5.12		中組部安部長：当面天津で助っ人、文代会の後北京残留か上海行きか相談することに／馮乃超／安、李克農と袁牧之の所へ、夏衍すでに到着、食事／夕食後、周揚宅へ：いくつかの問題点。
5.13	周恩来、周揚 夏衍・沙可夫 阿英を接見、 党の統一戦 線政策、文芸 の具体方針 を説明。	夏衍、許滌新、後から金山も／朝食後、柯靈／王府井新中国書店へ／宿舎で休んでから琉璃廠へ／柳亜子へ手紙等、夜周揚に托す／8時、袁の車で中南海へ、夏衍、許滌新、周揚、沙可夫、胡愈之、薩空了、茅盾、何其芳相前後して来たる。10時頃周恩来現れる：文代会、新聞紙問題、上海文化工作。夕食をとり3時半まで、4時帰着。
5.14		列車で天津へ、北解放路招待所へ。周而復、姜椿芳：即時北京行きを依頼／于立群に昨夜の皆の意見を伝える。
5.18		周巍峙、孟波と夕食の約束／出発準備。
5.19		郭沫若より于立群に電報：24日朝天津着と／3時乗車6時北京着、北京飯店304に入る。
5.20		朝食後李克農／李の車で中南海へ齊燕銘訪問：于立群出迎いの件／頤年堂で昼食、陽翰笙、張駿祥、白楊、張瑞芳、孫維世らに周揚夫妻。
5.22	『文芸報』座 談会を開き 新文学の任 務、組織、綱 領等話しあ い	(周揚×)／李克農の所で周揚宛手紙を書く／216号室に茅盾夫妻を訪ねる：文代会／夜、柯靈×、金山×／305号室に于立群を訪ね、長話。
5.23		(周揚：夜集まって話しあいの約束)／東総布胡同に沙可夫訪問×／夕食後周揚訪問、会議中で会えず、終了後北京飯店に来ると／12時周揚来たる：天津問題、逐一解決。
5.24		起床後天津文教部へ至急電話：昨夜の周揚との話しあいの結果を伝える。
5.25		中組部安部長／馮乃超／和平代表帰国、天安門で会議あるも行かず／鄭振鐸、洪深、曹禺ら：11時まで話しあい。
5.26		天津市軍管会主任の黄克誠とともに茅盾、郭沫若、田漢訪問／欧陽予倩夫妻／華北電影公司より周巍峙の手紙転送さる／昼食後、沙可夫：天津問題／董均倫、蕭三／頼少其×／帰室、頼が来ていて華東代表として文代会出席を約束。渡江作戦の話／夜、洪深／『文芸報』4期を貰って来る／荷物整理、就寝。
5.27	(解放軍上海 占領)	7時半の天津行きを寝過ごす、雨模様で決行せず／鄭振鐸：文物の散逸。次回北京に帰ったら周恩来に相談することとなる／夕食後、郭沫若、金山：雑談。
5.28		11時天津招待所着、黄松齡部長／文芸処、周巍峙、孟波。

5.29		5時起床、7時の列車で北京へ／柳亜子から手紙／宋雲彬、鐘敬文／郭沫若に贈り物／馬衡／夕食後周恩来の報告を聞き、情勢分析、民主人士への工作を決定／華東野戦軍のヤンコ劇観る、沈亜威、沈西蒙、涂克皆来る、涂は明日上海へ／金山：映画の題材／蔡楚生は306号室と判明。
5.30		前門の本屋へ、収穫なし／袁牧之より『橋』の券貰うも時間なく行けず／夕食後李克農、金山、曹禺、張瑞芳らと工場工作問題を談ず。
5.31		周恩来に手紙を書き、金山に托す／鄭振鐸：雑談／蔡楚生／夕食後顧仲彝、邵公文。
6.1		旧暦端午の節句、粽を食べる／4時まで昼寝／沈西蒙、沈亜威、蘇ら。
6.2		頼少其一行／(鄭振鐸)／傅惜華：漢学会組織／柯靈。
6.3		(齊燕銘×)／李克農／厚祥と『橋』観劇／(周恩来11時来訪、と)金山、盛家倫ら／周恩来待てども現れず。
6.4		金山：昨夜周恩来は用事で来られなくなったのだろう、と／張瑞芳：演技のこと／周揚×／李一氓武漢行きの消息／金山11時上海へ／郭沫若／陽翰笙／『文芸報』5期入手。
6.5		東安市場へ、蔣光慈『一週間』購入／柳亜子、齊燕銘、齊白石、徐悲鴻／午後、厚祥、郭沫若と市場散策、郭から琉球瓶を頂戴／于立群からパーカー万年筆頂戴／夜、舒湮、顧仲彝夫妻、張駿祥夫妻と北海公園でお茶。
6.6		袁牧之／茅盾／昼食後、鄭振鐸、李一氓と琉璃廠へ／郭沫若／(齊燕銘)
6.7		李一氓／昼食後、『文芸報』を読む、明日の映画座談会の準備／夕食前、周恩来5時に談話発表と聞き駆けつける／中南海で周恩来：文物管理組織問題／7時、鄧穎超、李琳と北京飯店へ帰る／夜、柯靈、鄭振鐸、魏建功。
6.9		李克農：文代会工作／夏衍、楊之華に手紙、夏衍旧作の『犠牲』や『平林太子集』もいれて送る／午後、李一氓、袁殊、鄭振鐸と琉璃廠へ本探しに／夜、李克農、李一氓、袁殊、袁牧之、羅静予、林莉と食事。
6.10		周揚：文代会党グループ会議参加、大会後の天津帰任が決まる。天津へ手紙／午後、欧陽予倩／夜、馬彦祥、何海生、沈起予、鍾敬文／鄭振鐸／戈宝権／曹禺夫妻。
6.11		夕方、天津へ／錢瓔、嚴学優、陳廷驥より手紙。
6.12		周巍峙、孟波：文芸処問題／黄市長が程硯秋、王迎秋のために招宴、陪席／夜、二人の舞台を観る。
6.13		車で4時出発、6時半北京着。
6.14		昼食後、周揚／部屋は北京飯店305号／文代会へ行き第1回党グループ会議記録を読む／陳企霞／夜、鄭振鐸、翦伯贊。

6.15		安部長：天津、大連問題／李一氓、鄭振鐸、郭沫若／夕食後、李一氓と隆福寺へ。
6.19		北辰宮で張凌青、馬少波、王淑明、朱繼基ら／胡考／(葉浅予：工人画展)
6.20		早起きして報告提要を書く／8時半、柯霊と建国礼堂へ行き報告：工場戯劇工作／香港、上海戯劇界、解放区劇団到着／東山、鳳子ら／袁殊夫妻／夕食後、何海生：京劇界。
6.22		東郊(交?=釜屋)民巷漢学研究所へ、傅惜華、吳曉鈴、趙燕声、フランス人2人／大華で『シベリア交響曲』観る、感動／夕食後、文代会へ、陳企霞／帰ると李克農から京劇シナリオ着：審査依頼／黄葉眠、鍾敬文より香港五四30周年記念の刊行物等届く／文代会より『文芸報』6, 8号取ってくる／董均倫。
6.24		8-12時、映画館で『大翻身』審査／午後2-10時、文代会党グループ会議(大会主席団、各代表団組織、規約および『大翻身』問題)／趙樹理。
6.25		2時半-5時、文代会へ、規約討論／東安市場／夜、馮乃超、李一氓。
6.26		7時(夜?=釜屋)、華東代表団へ、団長辞退／9時、周揚らと中南海へ、周恩来へ報告、朝4時終了。
6.27	準備委員会主任郭沫若「空前団結大会」の談話発表。	1時半、周揚らと上海代表団を迎えに。未だ天津に停車中と／夜再び駅へ、7時45分頃到着／頼少其と歩いて帰る／陸万美、メモを残す：華東代表団責任者の件。明日断ろうと思う。
6.28	大会アトラクション「劇音演出」開始。	李一氓と傅惜華の所へ版画を見に行く、佳作多し。
6.30	「大会予備式」代表全員の名簿採扱、総主席(郭沫若)、副総主席(茅盾・周揚)、主席団(丁玲ら99人)選出、大会機構・主要工作人員決定(注15)	今日は大会「予備会」。8時懐仁堂へ、大会は12時に終わる／主席団、菜館で食事／再び懐仁堂へ戻り主席団会議、続いて常務委員会、3時半終了／周揚と「市府」へ、文代会党グループ会議、周揚報告、7時終了／周揚、周文と文代会で食事。
7.1	大会休会。党中央へ祝電。	3時半、階下の新史学研究会準備会へ、范文瀾／毛主席『論人民民主專政』発表。

7.2 大会初 日	大会正式開幕。開幕詞(郭沫若)、大会準備経過報告(茅盾)、資格審査報告(馮乃超)、先烈への黙禱/来賓;朱德(党中央)、董必武(華北人民政府・中共華北局)、陸定一(中宣部)、李濟深(国民党革命委)、沈鈞需(民主同盟)、葉劍英(中共北平委・北平軍管委・北平人民政府)、朱学範(全国総工会)、李秀真(解放区農民団体)、李徳全(民主婦聯)、錢俊瑞(新民主主義青年団中央・全国民主青年聯合)/献旗:華北軍区特殊兵部隊参謀長/大会主催の芸術展覧会始まる。	文代会開幕式。午前9時頃開幕、午後1時終了/昼食後、主席団常務委員会。
7.3 第2日	議長=丁玲/総報告(郭:为建设新中国的人民文艺而奋斗)/来賓講話;北平被服廠ミシン工、第70兵工廠労働者/柯仲平、自作詩朗読/臨時提案:国統区の文芸戦友に敬意を表する長い拍手。	郭沫若報告、丁玲議長。途中柯仲平新作詩を朗読/労働者一人、女工一人講話、12時頃終了/規約修正完了、各方面からの提案を読む/午後、主席団常務委員会/姚警塵、毛主席に代わって7.1文献への意見を求めていると。
7.4 第3日	議長=田漢。報告(茅盾:国統区10年の革命文芸運動)/デイミトロフ逝去の報告、黙禱。弔電を決議/献花;北平被服廠子弟学校児童代表4人/開催中の全国鉄路職工代表大会に祝電。	7時半、懐仁堂で会議/大会3日目、茅盾、国統区10年間の文芸状況を報告/小学生献花に来る/昼食後、主席団常務委員会/3時に帰り戯劇提案討論会に参加、程硯秋、周信芳、葉盛章、葉盛蘭、李少春参加。
7.5 第4日	議長=李伯釗。報告(周揚:解放区文芸運動)/三代表団の提案で解放区文芸工作者に敬意の拍手/北平曲芸界代表連闊如の歌。	大会4日目。8時開会、周揚報告/朝7時半懐仁堂へ行き、周恩来の報告を聞く:各党派7.7連合宣言の説明、約3時間/毛沢東、明日文代会へ来ると承諾。
7.6 第5日	議長=阿英。午後2時、周恩来副主席列席、政治報告/北平市児童団献花/北平国劇公会代表葉盛章ら7人献旗/7時20分、周報告の終わる頃毛主席突如来場、簡単な挨拶、「全场欢声雷動」	大会5日目。8時、東総布胡同で党グループ会議:各協の準備工作。まず党内小組を作る、平劇と雑技は独立させる/1時45分会場へ行き開会、今日は私が議長/2時周副主席が報告開始、途中2回休憩、およそ6時間、8時頃終わる/スライド上映、国劇公会の献花/7時頃、毛主席来る(昨夜眠らず、行かない、と電話があったのだが)「全场欢動」拍手30分に達す。

7.7 休会	大会休会。午後、代表団全員雨の中「七・七」記念大会へ。	9時、東総布胡同で旧劇党グループ会議召集／4時、宿舎で主席団常務委員会：日程修正、各組組長に通知／本日20万人集会あり、たいへんな賑わい、ただ、6時集会終了時、敵機大隊湖南を飛び立つとの警報、集会解散、ついに行かず／8時、東総布胡同で小組報告会を開く、12時帰る。
7.8 第6日	「小組会」に分かれ大会報告を討議／主席団は第2次全体会議、議長は茅盾：大会報告について意見交換、文学・戯劇・美術・音楽・舞踏・旧劇・曲芸の7小組の責任者を決め、ジャンル別協会設立の相談。	9時開会、大会6日目／主席団第2次会議、午後1時頃終わる／馬少波：改良京劇の原稿見せに来る。
7.9 第7日	議長＝沙可夫。この日はテーマ別発言：陽翰笙、柯仲平、丁玲ら／来賓講話：陳伯達(中宣部副部長・馬列学院副院長)／祝電：ファジェーエフ、ショーロホフ、シモーノフ、ソビエト作曲家協会。	大会7日目。丁玲、壁につきあつた体験の報告／陽翰笙、柯仲平各15分発言／昼食後、主席団常務委員会／3時、翠明荘で小組召集人会議／6時、階下の酒場で会議：懐仁堂の芝居の演し物を討論。梅蘭芳、周信芳、程硯秋、葉盛蘭、葉盛章、李少春、袁世海らをまねく、姚玉芙も来る、8時頃解散。梅、周二晩の演目決まるが程は未定／柳亜子の手紙4通、『文芸報』10期受領／馮乃超より『寓言三百篇』受贈／テーマ別提案5通受取る。
7.10 第8日	議長＝周揚。自由発言と昨日に続くテーマ別発言：戴愛蓮、劉芝明、鄭振鐸、趙樹理、蔡楚生、陳望道、高士奇、頼少其、畢革飛、梅蘭芳、周信芳、董天民、王聡文ら／俞平伯、自作新詩「7月1日紅旗的雨」朗読で発言に換える／北平市曲芸界曹宝祿、侯宝林ら献旗／祝電披露：ソ連作家協会(郭沫若)／午後、文学・戯劇・美術・音楽・電影・旧劇・曲芸・舞踏の8組に分かれグループ討議。	8時前、山東報告の添削終わる／大会へ、第8日目、自由発言／午後、主席団常務委員会、続いて旧劇グループ会議。

7.11 第9日	議長＝洪深。引き続き自由発言：曹禺、陳学昭、楊晦、鐘敬文、馬思聰、時樂濛、王池子、連闊如ら／開会前、郭沫若が南方代表第1団団長張西曼の病死発表、遺言と遺詩朗読、全員起立、哀悼／来賓講話：錢俊瑞(ソ連文芸界の闘い)、王祥、李昂(全国鉄路職工代表大会代表)／午後7時、大会参加の曲芸界代表が北平、石家荘、冀魯豫の曲芸工作者を招き、経験交流(60人、中山公園「来今雨軒」)	大会9日目。自由発言／午後、主席団常務委員会／夕食後、国民大戲院へ、華北大学三院の『紅旗歌』を観る／大会の記念冊子受贈。
7.12 第10日	議長＝柯仲平。蕭三：プーシキン150周年大会参加報告／傅鍾(人民解放軍政治部副主任)：軍文芸工作／朝鮮族代表献旗、合唱／内モン代表献旗、蒙古踊り／輔仁大学師生代表献旗／王統照、自作新詩「文代会頌」朗読。	記録なし。
7.13 休会	休会。午後、中華全国民主婦女聯合会、北京飯店で茶会を開き、文代会出席の女性代表を歓迎、創作座談会も。	記録なし。
7.14 第11日	議長＝陽翰笙。文聯規約草案経過報告(沙可夫)、討議、採択／文聯委員会選挙条例採択／北平評劇界代表、北平市中小学校教聯代表献旗、献花／明日休会のため、聞一多「死難」3周年の黙祷等本日挙行／中共華北局、華北人民政府等各種団体が御河橋2号でカクテル・パーティ、全代表を招く。	大会11日目。規約および選挙規定採択／昼食後、主席団常務委員会／夕食後、東安市場へ／帰って提案整理。
7.15 休会	各代表団個別に文聯全国委員候補者名簿を討議。	各代表団初めて候補者を選ぶ、大会は開かず／9時、中南海へ、艾青整理の提案受取り、すぐ琉璃廠へ／帰って提案整理、3時頃終了、文代会へ届け印刷に回す／党グループ会議／夕食後、李一氓と李桂雲、柳子鵬を観に行く、やはり見事。李は梅蘭芳の弟子。
7.16 休会	各協の組織問題、非公式下相談／芸術展覧会閉幕。	大会13日目。提案を討議(注16)／午後、主席団常務委員会／平劇党グループ会議／中ソ友好協会発起人会、周恩来、朱徳総司令の報告を聞く。
7.17 第12日	議長＝曹靖華。文聯全国委員候補者名簿採択、続いて投票／阿英、諸提案整理の経過報告、討議／聶耳逝去14周年、黙祷／北平図書館、歴史博物館職工代表献旗、献詞／午後、代表の中の詩歌工作者40余人座談会／7時半、文代会音楽代表と北平市音楽界、大華影院で聶耳記念音楽の夕べ。	起床後、引き続き提案整理／大会14日、選挙、提案の討議継続／昼食後、主席団常務委員会／2時、東総布胡同へ、党グループ会議。
7.18 休会	休会。	9時、懷仁堂へ行き、提案審査委員会開く／午後2時、中南海へ、戯劇協会準備会開く、5時頃終了。

7.19 第13日 最終日	閉幕式。文聯正式成立。議長＝馮雪峰／全国委員当選者名簿発表／総主席郭沫若「結束報告」／毛、朱、人民解放軍全将兵と新政協準備会へ電報／大会決議／北平市特殊手工業聯合会、献旗／各文工隊、献旗／臨時決議2件／郭沫若、閉会の辞／11時頃、全員「全国文芸工作者は団結して工農兵に服務する」等のスローガンを高く叫び、勇壮な器楽演奏の中、閉幕。	記録なし。
7.20	中共中央、中国人民革命軍事委員会合同で文代会参加、出演の文芸団体を招待(32団体 2000人)。周恩来、陸定一、郭沫若、茅盾、周揚ら出席／『人民日報』社説「我们的希望—祝全国文学艺术工作者大会胜利闭幕」	朝、弓弦胡同へ行き芝居上演問題話しあう／周信芳の所で旧劇組の会議(招集者なり)、午後2時終了／帰ると周巍峙が来ていてソ連の工場文化活動の資料収集について話しあう／文代会で党グループ会議、7時まで。
7.21	中華全国美術工作者協会成立(中山公園)／午後5時、中共中央、中国人民革命軍事委員会合同で文代会代表全員を招く(北京飯店)。朱徳、陸定一、聶榮臻出席／午後、全国舞踏工作者協会準備委員会成立(華北大学第三部)	朝、阿甲夫妻／隆福寺文奎堂へ／帰って梅蘭芳上演の事処理、欧陽予倩と旧劇会議事件を話す／午後2時、文代会で上演問題、旧劇組代表会議開く／5時、中央が階下で大会代表をもてなす、朱徳総司令来たる／夜、徐平羽南京より来たる、12時頃まで話す、渤海飯店泊／大会がくれた人民文芸叢書1セット50冊を子どもに取りにいかせる。
7.22	中華全国曲芸界改進黨準備会成立(中山公園「来今雨軒」)	記録なし。
7.23	中華全国文学工作者協会成立大会(中法大学大講堂、代表208人)。来賓は林伯渠(中共中央委員)ら／午後、中華全国文学芸術工作者聯合会全国委員会第1次会議(北京飯店)、出席委員64人、議長＝茅盾。正副主席、常務委員の選挙、文学・音楽・舞踏・美術・戯劇・電影・および戯劇改革協会、曲芸改進黨を文聯全国委員に決定。	大会提案を整理、午後1時終わる／階下で全国委員会、常務委員、各部責任者、政協会議に出る代表選出、7時に終わる／夕食後、子どもと長安戲院へ、楊宝森「文昭関」、葉盛章、李少春、裘盛戎の「三岔口」、梅蘭芳、劉連榮の「霸王別姫」を観る、12時半帰館／今日の新政協パーティ、毛主席、朱徳総司令ともに来たる。
7.24	中華全国戯劇工作者協会成立(代表185人、委員88人、同候補27人)／詩歌工作者聯誼会成立。	今日、劇協成立／昼食後、徐平羽と琉璃廠へ／李一氓と雑談／江清風、大連より来たる。
7.25	中華全国電影工作者協会成立(北京飯店)	部屋で会議、周信芳、欧陽予倩、田漢、天民らと旧劇協会問題相談、4時半終了／陸部長、周揚と程硯秋のパーティの事で話しあい／朱光、江清風。

7.27	中華全国戯曲改進黨準備委員会成立(主席欧陽予倩)／『人民日報』毛沢東の題詞「推陳出新」発表。	記録なし。
7.28	戯劇、音楽の催し物、本日終了。【『紀念文集』の「大会紀要」はここで終了一釜屋】	記録なし。
7.30	彭慧、柯靈、孔另境／(齐燕銘：梅蘭芳のこと、周恩来は遺留せよと)	
8. 1	朝食後、中央組織部へ、子どもたちの紹介状受けとる／馮乃超：鄭振鐸のこと／華東代表団、今日帰郷。	
8. 2	8時半駅へ、馮乃超、巴金、陳子展、趙家璧らを見送り。	
8. 6	鄭振鐸／傅惜華／2時、部屋で戯曲会議／夕食後、洪深：信徒の入党是非のこと。	
8. 7	李克農×／2-5時、戯曲会議／田漢、周信芳、洪深、欧陽予倩、馬彦祥と梅蘭芳、周(注17)送別のため六国飯店で夕食／欧陽予倩と汪家胡同の傅家へ、杜穎陶に会う／雨の中帰る。	
8. 8	朝、李克農／駅へ、梅、周を見送る／3時、李主席(注18)と絵を見に行く。	
8. 9	3時、李一氓と頭髮胡同へ絵を見に行く、琉璃廠へも／帰ると郭沫若夫妻：雑談／夜中、伯青、張愛萍について上海から到着、訪問。	
8.12	朝食後、琉璃廠、頭髮胡同一带をお別れ歩き／夜、周揚、郭沫若、張愛萍、李一氓、田漢らに別れの挨拶、茅盾に置手紙／トランクを階下へ運び、チェックアウト。【日記完一釜屋】	

ここから、いったい何を読みとればいいのか。視界はなお良好ではない。今後の作業のために、あえていくつかの問題点を残しておこう。

(1) とにかかくにも、苛酷な活動日程である。建国を目前に控えた高揚、その中で自己が担っていく任務への期待と不安、久しぶりの古都での生活……そして「空前」の大会。日記に記録のない日、阿英は少くは個人的な生活の楽しみを味わったのであろうか。本屋、絵の所蔵個所を求めての奔走は、任務だったのか、個人の趣味だったのか。周恩来から、ある程度心を許せる友人まで、息つく暇もない、任務を背負ってのつきあいは想像を絶するものがある。49歳の阿英は、とにかく乗りきったようである。

(2) 党組織と文代会……大会前から文代会参加の党員は党グループ会議に参加していた。阿英は、6月10日周揚から党グループ会議参加の話があり、3日後の14日、自分が参加していなかった第1回党グループ会議の記録に目を通してある。阿英の記録にまちがいなければ、この「第1回」が最初で、文代会のための党グループ会議が組織されたことになる。もともと、大会の骨子が決まるのは3月下旬の大会準備工作委員会であり、4月30日の準備委臨時常務委員会で茅盾、周揚の報告等が決められており、こうした決定に党組織が関与していないとは考えられないので、6月以前にも党グループ会議は開かれていたにちがいない。ただ、大会を目前にして、改めて党の組織を動員して、新たな党グループ会議

を組織したこともおおいにあり得ることである。阿英日記の中には、党関係の任務と明記したものやそうでないものがある。明記された党グループ会議と、主席団常務委員会をとりだしてみる。

党グループ会議 7回=第1回 (月日不明) 6.24 6.30 7.6 7.15 7.17 7.20

主席団常務委員会 9回=6.30 7.2 7.4 7.9 7.10 7.11 7.14 7.16

党グループ会議に何人が参加したのか、きまったメンバーだったのか、召集人は誰だったのかもわからないし、ましてや議題と討議内容等は、阿英日記はほとんど記録を残していない。大会運営の中核である主席団常務委員会を包み抱えるように党グループ会議が開かれている。「大会紀要」で「議長」と明記されてその職については、丁玲、田漢、李伯釗、阿英、沙可夫、周揚、洪深、柯仲平、陽翰笙、曹靖華、馮雪峰である。このうち、非党員は誰か、非党員はもちろん党グループ会議に参加できなかったはずである。今後の課題とする。

(3) 阿英の任務……阿英の具体任務は何だったのか。旧劇改革と各方面から大会に寄せられた提案の整理だと考えられる。旧劇、平劇の党グループ会議(この二つが同一の会議かは不明)、改良旧劇シナリオの審査、京劇俳優との接触等から見て、阿英の任務は明らかである。日記からかすかに匂ってくるのは、旧劇改革に関する熱意、京劇役者を巡るなんらかの不透明ないざこざ等である。残念ながら、何かあったらしいという以上にはわからない。しかし、解放後の阿英が、結局は、天津に留まり、天津市文化局長、市文聯主席等の職について、戯劇工作者協会常務委員(主席は田漢)、戯曲改進黨準備会常務委員(主任は歐陽予倩)の任について旧劇改革等の仕事に携わること、すべて文代会前後で決まったように思われる。漢学研究所の傅惜華と頻りに会っている。傅惜華(1907-1970)は、満族の戯曲研究家、30年代から北平国劇学会の『国劇画報』編集長で北京大学教員であり、解放後は中国戯曲研究院研究員兼図書館長、日記に顔を見せる呉曉鈴、杜穎陶はおそらく弟子であろう。阿英は6月上旬に鄭振鐸と傅惜華および研究所について話しており、その後李一氓、歐陽予倩を伴って訪問している。研究所所蔵の絵画に強い関心を示している。阿英は、多忙な日程の中、琉璃廠に6回、東安市場に3回、隆福寺、頭髮胡同に各2回、前門へ1回でかけている。同行者には、鄭振鐸、李一氓、袁牧之、徐平羽がいる。傅惜華のこと、たびたび書画・骨董の町にでかけていること、どこまでが公的な任務と関係するのか、あるいはまったく個人的な営為なのか、今はまだわからない。

提案処理委員会は、阿英主任のほか、委員には陳望道、曹禺、蔡若虹、靳以、楊晦、張致祥、馬健翎、向隅、孔羅荪、時樂濛、張凌青、艾青、宋之的である。このうち、日記に姿を見せないのは、蔡、靳、馬、向、孔、宋である。もちろん、提案整理委員会を開いた時に顔を見せているのであろう。

(4) 阿英と党中央との関係……阿英の所属組織は不明である。ただ、天津から北京に到着後、直ちに駆けつけたのは、中央組織部であった。そのような指令のもとに動いたのか。建国後の自身の身の振り方に関係した相談をしかけているが、それも指示された動きなのか、それとも特定のコネがあつて自分自身で動いたのか、まだよくはわからない。最後に子どもたちの紹介状を取りに行っていることからすると、あるいは組織的に「中央直属」だったのかもしれない。

(5) 阿英が多く接触した人々……北京―天津を何度か行き来し、多忙を極めた阿英が、頻繁に会った人々は、公私不明のままあげれば、次のようになる。

李一氓 13回 周揚 12回 鄭振鐸 10回 李克農 9回
郭沫若 8回 金山 7回 周恩来 7回 歐陽予倩 7回

純粋に任務遂行上の必要、任務上の必要と個人的交友の深淺・好悪が微妙に絡んだもの、過去のいきさつも絡んだまったく個人的(過去が絡んだ以上個人的と言いきれない事情が貼りつくが)なものが明確には分かちがたく浮かびあがる。鄭振鐸と相談して周恩来に直訴しているかに思える文物散逸への危惧、そのための保管と保管組織の問題は、貴重な文献収蔵家となった阿英のその後を考えると、納得のいく行動ではあるが、それらがどこまで公的なものか、どこまでが私的な好みなのか、判断に迷う。別の面からの考究が必要となる。

李一氓、李克農との接触が異常に多い。この関係は、3人の長い革命参加経験と密接にかかわっているのであろう(注18)。3人とも古参党员。李一氓は1925年、李克農と阿英は1926年の入党である。李一氓は四川、阿英と李克農は安徽の出身。李一氓と阿英は上海、蘇北根拠地で活動したことがあり、李克農は瑞金、西安事件に姿を現してしている。二人の李は、長征参加者である。3人の接点として考えられるのは抗日根拠地である。李一氓とは、琉璃廠へ2回、隆福寺へ1回、版画・絵を見にでかけたのが3回、個人的つきあいに共通の趣味が加わったものかもしれない。李一氓は、のち中共旅大地区党委副書記、大連大学学長、ビルマ大使、中共中央対外連絡部副部長を歴任し、最後は中共中央規律委員会常務委員になっているが、途中、国務院古籍出版規画小組組長の任についている。李克農とは、中南海で会ったり、工場文化活動について語ったり、文代会の工作を談じたり、京劇シナリオの審査をもちこまれたりしているが、よくはわからない。前述『思痛録』に、李克農は弾圧側の人物として登場している。その晩年は、中央軍事委員会総情報部長、軍副総参謀長、中共八全大会では中央委員に選ばれている。二人の李は、もちろん文代会とは直接の関係がない。阿英が、この二人との関係をなぜ重視したのか、いまはわからない。

(6) 洪深とは3回しか会っていないが、8月6日夜、「信徒の入党の是非」について意見交換しているが、当時そのような会話が話題になっていたことに興味をひかれる。あるいは

は周恩来が話していた「民主人士」対策の一環だったかもしれないし、二人だけの、隠れた論議だったのかもしれないが、今は明らかではない。

すべての問題が、未解決のまま、放りだされている。長い作業の今後の課題としてご海容を願ひあげる。第一次文代会の直後、7月23日中華全国文学工作者協会(文協)が中法大学大講堂で成立大会を挙行し、茅盾主席、丁玲・柯仲平副主席が選出された。50年の歳月を隔て3人ともすでに鬼籍に入った。常務委員会21名中、生存者は巴金ほか数名にすぎない。文聯の下部組織として出発した文協であるが、やがて中国作家協会と改称し、文聯傘下を離脱し、対等の独立団体となって今日に至っている。今回は、その作協の歴史に焦点をあてたい。

【注】

1 個別情報として、以下のものがある。北京作協は、契約作家に月600元の生活費を支給、作協年間総額は10万元になる(文芸報98.12.8)。／いちばん早いのは黒龍江省、親方五星紅旗式「伝統管理体制」打破の試みとして93年10月、22人の業余作家を「駐地合同作家」とした。「駐会」「駐地」の「複線制」で、「駐地」の契約は3年、元の職場を離脱せず、作協の指導を受けつつ、省クラス以上の刊行物に30万字の作品を発表・出版する。任務未達成の場合は契約解除(光明日報93.10.29)／遼寧省作協は、97年5月『文芸講話』55周年を記念して遼寧各地から厳選された20名の作家と契約。1年間で7名が各地の文芸賞を受賞、「作家終身制」の変革、新人激励、競争奨励の成果をあげた(作家報98.5.16)／春風出版社契約作家1号は女性の嚴麗霞、全国初の出版社との契約作家でもある(作家報98.5.16)／広東省作協・広東青年文学院は、1994年300名の中から陳染、東西、余華、韓東ら9名を「高薪招聘青年作家」として招いた。2年間、給料1200元、毎年2ヶ月以上は広東に来て創作活動を行う、が条件(北京日報94.8.18、文学報94.8.18)。第2次は、97年5月、『佛山文芸』の援助(年間20万元)のもと、全国21箇所、90名近い応募者の中から、談歌、関仁山、畢飛宇、蘇曉亮他省の人気作家9名が選ばれ、2年の契約を結んだ。給料1200元、医療費年間500元、年1回の里帰り費用付き、作品は『佛山文芸』に優先掲載(文芸報97.5.22)

2 以下の各雑誌、新聞等の、各時期に出された断片的情報を筆者がまとめたり、関連づけたりした。『文芸報』『文学報』『作家報』『作家文摘』『人民日報』『光明日報』『文匯報』『北京晚報』等。

3 当時北京滞在中の加藤三由紀さんの帰国報告(日本・中国当代文学研究会1999年4月例会)では、関係者の言として、停刊・他分野への進出は純粹に経済的理由からという。

4 その後、『人民文学』は1999年度予約分が10%増えたとの報道がある。(文芸報99.3.16)

5 会期は通常17日間とする資料が多いが、7.13,15,16の4日間は他の行事参加や代表団別討議のため休会となっていて、厳密には開会日は13日間。

6 王瑤『中国新文学史稿』(上下)は香港波文書局(1972)版による。『王瑤先生紀念集』(天津人民出版社・90年8月)によれば『史稿』(上)は51年9月開明書店、(下)は53年8月上海新文芸出版。82

年 11 月上海文芸出版より修訂重版。『中国文学家辞典・現代第一冊』の王瑤の項では(上)も上海新文芸出版とする。なお、『紀念集』所収の錢理群「王瑤先生文学史理論、方法描述」「王瑤先生現代文学史研究概述」は、王瑤文学史理解に示唆的である。また、同書に関連して丸山昇は「実はこれ以前は、六朝文学を専門にしており、……、若い専任講師だった王瑤があまり引き受け手のいなかった現代文学を押しつけられた、というに近い事情があったらしい」と書いている(「民主を求める人びと・序章①」日中友好新聞 94.9.15)

7 『作家文摘』の記事は『縦横』99年第2期からのダイジェストである。

8 赫長海・呉懷斌編『老舍年譜』(貴山書社 88年9月)に呉伯簫『作者、教授、師友——深切怀念老舍先生』からの引用として紹介されている(107-108 ページ)

9 注8同書 108 ページに克瑩等の『老舍先生在美国』からの引用として紹介されている。

10 石垣綾子「老舍——在美国生活的时期」(新文学史料 85.第3期)

11 以下、辺区文協の歴史は、とりあえず、王劍青・馮健男『晋察冀文芸史』(中国文聯出版公司 89年12月)による。

12 『丁玲文集』第9巻(湖南文芸出版社 95年1月)に「日記」(一)(二)があり、(一)は「1947—1954 生活断片」となっている。そのうち、1949年は、3月14日(北京)から5月24日まで。3月19日に訪ねてきた劉芝明と文代会のことを話したとあるが、4月パリ開催の世界平和大会参加のため3月29日出発(結果的にはフランス政府の入国拒否にあいブラハとの2箇所開催になる)から、帰国(5月24日北京)までの記録である。趙樹理と娘広建の北京入りは49年4月初め、この丁玲日記には趙との出会いは見ることができない。なお、阿英日記に出てくる平和代表はもちろんこの丁玲たちのことである。

13 董大中「東西総布胡同会議」(作家文摘 98.9.9/原載は『文匯読書報』8・8・1)

14 阿英日記掲載後、3人の遺族が「关于《第一次文代会日记》」を寄せ(新文学史料第3輯=79.5)、呉も「关于《第一次文代会日记》注释的说明」を書いたが(第4輯=80.1)、事実認定に重要な変更はない。

15 『紀念文集』原文は「大会举行预备式」とし阿英は「预备会」とする。また『文集』は7月2日を「大会正式揭幕」としつつ、7月1日を「大会休会」とする。

16 阿英は7月16日大会が開かれたと考え、16,17日を大会第13,14日目としている。記憶ちがいであろう。

17 日記では、送る側と送られる側と双方にそれぞれ「周」がいる。呉は送る側の「周」を「周信芳」と注釈しているが、もう一方には説明がない。

18 「李主席」は李一氓のことか。李一氓はかつて蘇皖辺区政府主席の任についたことがある。

19 李一氓、李克農の経歴は、程敏主編『中国共产党黨員大辞典』(中国国際広播出版社 91年4月)による。

1999年6月30日